

2025年度業務実績報告書

提出日 2026年1月16日

1. 職名・氏名 教授 今井 朋実
2. 学位 学位 修士、専門分野 社会福祉学 授与機関 カンザス大学
授与年 平成10年5月

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習

① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

現代福祉問題論（2単位）1年次、ソーシャルワーク演習1（1単位）1年次、ソーシャルワーク論Ⅲ（4単位）2年次、ソーシャルワーク論Ⅳ（4単位）2年次、精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅰ（1単位）3年次、精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅱ（1単位）4年次、社会福祉演習（2単位）3年次、卒業研究（4単位）4年次、社会福祉援助特論（個別）（2単位）大学院1年次、社会福祉援助演習（2単位）大学院2年次

② 内容・ねらい

講義・演習への取り組みについては、着任後9年目であり、これまでの取り組みを振り返りながら取り組んだ。

【現代福祉問題論】1年生に対する教員の紹介を兼ねた講義科目であるため、ソーシャルワークとは何か、について基本的な概念の理解を念頭に講義を行った。

【ソーシャルワーク演習1】初めて社会福祉の概念に遭遇する学生を対象に、ソーシャルワークの基本的な概念を交えて分かり易く授業を展開した。高校生から大学生への移行がソフトランディングされるように、講義ではありつつも、演習科目というコミュニケーションが主体となる科目であるため、学生の交流も兼ねる効果もあることが、学生のリアクションペーパーの感想からも伺えた。そこで、学生のコミュニケーション促進の役割は大きいものであると実感したため、基本的なソーシャルワークの理論を提示してそれを踏まえて演習の中でコミュニケーションを主体として深めていった。

理論と演習は対か、あるいは表裏一体であると想定される。したがって、ソーシャルワークの基本理念・理論をある程度理解したうえでソーシャルワーク演習1が導入されることが望ましいと昨年度と同様思った。昨年と同様に、1年生に演習1を導入した新カリキュラムの意義について、その背景にある理論をある程度説明してから、演習を行うことに意義があると再認識したため、意識して取り組んだ。

【ソーシャルワーク論Ⅲ】ソーシャルワーク論Ⅲは30名の学生の講義科目である。前年度同様学生が押さえておくべきケースワークの歴史及び方法論、グループワークの歴史及び方法論について講義を展開した。

【ソーシャルワーク論Ⅳ】ソーシャルワーク論Ⅳでは、ソーシャルワークの援助過程の実際に関して、2コマ続きの1時限目は概念と方法論を提示し、社会資源を含めた制度運用の概観を紹介し、サービス利用計画については社会資源利用、社会資源開発、アセスメント、プランニング、チームワーク、ネットワークとの関連について講義した。それを踏まえて、2時限目には2日間にわたり、地域包括支援に焦点をあてて、地域包括支援センターと障害者基幹相談支援事業所からゲストスピーカーを大学に招き、それぞれの機関の業務の概要と社会福祉士の役割について講義をお願いした。また、保健医療分野として、東京都新宿区を中心としたHIV・AIDSとSTIの地域の包括的支援システムについて、ソーシャルワーク実践に関する知識と技術の獲得とそれらを教育と研究にフィードバックするため、現場との繋がりを持っていることから、それらの自身の経験を元に講義を行った。【ゲストスピーカー2件】

【精神保健ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ】3名の3年生、3名の4年生の実習指導を行った。4年生の精神保健ソーシャルワーク実習では、こころの森病院（福井市）、福井病院（福井市）、こころとからだクリニック（福井市）での病院実習と、地域活動センターやわらぎ（福井市）、

自立宿泊施設やわらぎ（福井市）、就労継続支援 B 型施設サニークホーム（越前市）における地域実習での実習指導を行った。前期は他の学年の授業が平行してあることから、合間を縫って、学生の実習指導時間のため実習施設を訪問した。無事に両実習を終えることができた。

【社会福祉演習（ゼミ）】今年度のゼミの登録者は 5 名である。各自の興味のあるテーマに沿い、前期、後期を通して各自 2 回ずつパワーポイントの資料を作成し、発表して貰った。それ以外に、学生が興味を持った認知症疾患センターである県立すこやかシルバー病院の見学実施を行った。石川県にある複合施設の見学も実施した。【フィールドワーク 2 件】

【卒業研究】今年度の登録学生は 4 名であった。精神保健福祉士受験資格を取る場合、5 月、6 月、7 月が実習期間となり、8 月の実習発表会まで卒業研究に着手できない状況が例年ある。そのため、4 月に卒業研究に向けての準備についてゼミで集中して提示し、各々着手し進めて貰い、夏休み後半から、12 月の提出まで、毎週グループ指導体制でゼミを実施した。添削の時期になると、学生も教員も体調管理が大切になるため、10 月ぐらいから、執筆を章毎に各自進めて貰い、できた人から小分けで提出して貰い、添削を行った。頁数の提出上限は 15 頁であるが、平均 30 頁の執筆であった。追い込みのために、提出直前には卒業研究ゼミ合宿を行った。

【社会福祉援助特論（個別）】大学院科目の社会福祉援助特論（個別）については、北米の修士課程で一般的に使用される D.H. Hepworth の” Direct Social Work Practice” の訳本を用意して、4 名の修士課程の受講生を対象として講義を行い、ディスカッションを行った。訳本であることと、社会的・文化的背景が異なるため、読みづらい部分もある書籍であり、章の頁数のボリュームが多い中、各自入念に資料を準備し、プレゼンテーションを行い、活発な議論が出来た。

【社会福祉援助特論（個別）】大学院科目の社会福祉援助特論

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

【現代福祉問題論】入学してからまだ 1 か月の新入生に対する講義のため、「ソーシャルワークとは」について分かり易く伝えることを心掛けた。

【ソーシャルワーク演習 1】新カリキュラム移行に伴い、1 年次の授業（ソーシャルワーク演習 1）から専門科目が導入された。一昨年、昨年も同様の感想を持ったが、ここ数年欠席や遅刻が目立ち、学生の状況への対応が余儀なくされた。学生の興味及び学習意欲は年度により異なるため、30 名（オムニバス形式で学生を奇数と偶数のグループに編成し、異なる教員が半分の 15 名×2 回の授業）を対象として、授業開始時期の学生の様子を観察することやリアクションペーパーにより学生の興味関心を知ることによって前年の授業案を修正して授業を展開した。演習科目のソーシャルワーク演習 1 については、2 年次に学習予定のソーシャルワークⅢと連動させて、ソーシャルワークⅢで扱う内容についてソーシャルワーク演習 1 を対応させて概念を先に 1 年生で学ぶ機会を持って貰った。

1 年生の新カリキュラムでは先に概念を学ばずして、演習 1 が始まるため、2 年生で学ぶことが想定されている内容について補足しながら、授業を展開した。学生にとって難解とも感じられる理論と応用（演習）を連動させることが理想ではないかと思っている。2 年生には、対応レベルの異なる事例をグループワークで行って貰い、事例を沢山積み重ねて考えて貰うことで、社会福祉実践の実際の考え方を涵養する機会を持って貰った。昨年にも増して学生が応用力に耐えうる能力を有していると実感した。

【ソーシャルワーク論Ⅲ】ソーシャルワーク論Ⅲでは、ケースワークの歴史及び方法論及びグループワークの歴史及び方法論について講義を展開したが、講義科目ではあるが、2 時限続きの授業であるため、アクティブラーニングの手法を用いて、1 時限には講義、2 時限には視聴覚教材やグループディスカッションの手法を対面授業で実施した。

ソーシャルワーク論Ⅲは 30 名の講義科目であるが、180 分という 2 時限続きの講義科目のため、教育効果や学生の集中力に課題がある。過度な学生への講義時間の負担を回避するべきとの認識のもと、前半 90 分は講義とし、後半はディスカッションを実施した。そのあと、リアクションペーパーの時間を設けた。ソーシャルワーク論Ⅲは講義科目であるが 2 時限目に視聴覚教材の視聴やグループディスカッションなどのアクティブラーニングの手法を取り入れた。このような形式にすることによって、教育効果や集中力の課題について、学生には理解が深まるものとなり、時間を有効に使うことができた。

【ソーシャルワーク論Ⅳ】講義とディスカッションの組み合わせで、アクティブラーニングの

手法を取り入れて授業構成を工夫した。学生にとって難解とも感じられる理論と応用を連動させることができたのではないかと考えられる。また、対応レベルの異なる事例をグループワークで行って貰い、事例を沢山積み重ねて考えて貰うことで、社会福祉実践の実際の考え方を涵養する機会を持って貰った。昨年にも増して学生が応用力に耐えうる能力を有していると実感したため、より高度な事例にあたり経験してもらうことも可能であることが分かった。最前線且つ最新の地域包括支援に携わる2名のゲストスピーカーに話をして貰うことで、高齢者支援分野と障害者支援分野について地域包括支援についてこれまでの理解より深く理解が出来たと、リアクションペーパーに記述があった。

【精神保健ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ】今年度は3名を担当した。どんなに事前学習をしたとしても、精神科における病院実習は学生にとっては、導入に苦慮することもある。それに対応するためには、実習指導者との緊密な連携が欠かせないが、現場の多忙さのレベルの違いにより、指導の濃淡があることがあり、且つ学生の特性により、学生に影響されることがある。学生が通える実習先が限定されることもあるが、実習先がどこでも良いわけではないため、取捨選択が必要であることを改めて実感した。

【社会福祉演習（ゼミ）】ゼミ担当の学生5名は、ソーシャルワーク実習のみ履修、ソーシャルワーク実習＋精神保健福祉実習の2パターンの学生がいた。全員のゼミの日程調整に多少苦慮した。各自のテーマに従い、纏めた上で発表して貰った。また学生の現在の興味及び将来の希望に沿い、福祉施設訪問を実施した。

【卒業研究（前期・後期4年生）】卒業研究（4年生）は4名を担当した。卒業研究では、卒業論文作成と仕上げの指導と、4年生の就職活動と日頃の生活が円滑に行われているかをモニターする役割がある。4名の就職先は、高齢者施設3名、障害者福祉施設1名であった。

今年度の学生の卒業研究のテーマは、①障害者就労支援事業所が抱える課題と就労選択支援について、②介護負担を感じる家族介護者を支えるソーシャルサポートとは～認知症高齢者とその家族が地域で安心して暮らす為に～、③認知症高齢者の自己決定～本人の思いを大切にする支援とは～、④生活の場としての特別養護老人ホームにおける看取り～本人・家族の意思決定過程における生活相談員の役割～、であった。

前期から後期にかけて夏休みの一部を除き、卒業研究のゼミを毎週実施し、各自纏めてきた進捗内容を、プロジェクターでスクリーンに映し出し、発表して貰い、映し出された資料をお互いに観ながらディスカッションを進めて行った。学生の論点がクリアになり、また相互学習を促進することにもなり、卒業研究を仕上げるにあたって、相互に学びながら進めることができたと考えられる。4名は平均すると規定の15枚を超えた20頁以上を執筆した。4名がいつきに締め切りの12月上旬間近に添削を願い出てくると、対応できないため、章ごとに区切り、順番に10月ぐらいから執筆を開始して貰い、少しずつ添削をして行った。また、卒業研究発表会に向けた資料も別途作成するため、こちらについても添削の対応をした。

【社会福祉援助特論（個別）】今年度の履修者の大多数は、ZOOMによる授業を希望したため、オンラインの授業で対応した。輪番制で作成されたプレゼンテーション資料により、活発な議論が展開された。

【社会福祉援助演習・修論指導】2名の修論指導を担当した。定期的にゼミを開催し、対面またはオンラインにて、修論指導を実施した。1名はユニバーサル財団の研究助成に応募し、研究助成を獲得した。連携・研究課の協力を得て、大学が研究費を管理してくれることになった。現在、今年度の提出に向けて1名は修論を作成中である。

(2)その他の教育活動

内容

男子アイスホッケー部顧問（令和元年4月～現在に至る）

認知症疾患センター県立すこやかシルバー病院と佛子園との連携による教育活動（社会福祉演習）

4. 研究業績

(1)研究業績の公表	
① 著書	【0本】
② 学術論文（査読あり）	【0本】
③ その他論文（査読なし）	【0本】
④ 学会発表等	【0件】
⑤ その他の公表実績	【0本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績	
(3)特許等取得	
(4)学会活動等	
社会環境学会 理事	

5. 地域・社会貢献活動

① 学外委員：

福井県社会福祉協議会 福祉サービス第三者評価決定委員会（高齢者福祉施設分野小委員会）
委員（令和 2 年 4 月～現在に至る）

福井県第三者評価機関認証委員会 委員（令和 6 年 4 月～現在に至る）

福井市地域密着型サービス事業者等選定委員会 委員（令和 6 年 4 月～現在に至る）

福井県すこやかシルバー病院 評議員（令和 6 年 4 月～現在に至る）

② 地域貢献活動：

静岡県福祉サービス第三者評価 評価調査者（平成 18 年から現在に至る）

東京都保健所（新宿東口検査・相談室）相談員（平成 15 年から現在に至る）

6. 大学運営への参画

(1)補職

(2)委員会・チーム活動

教育研究委員（看護福祉学部）（令和 7 年 4 月～現在に至る）

カリキュラム検討委員（社会福祉学科）（令和 7 年 4 月～現在に至る）

(3)学内行事への参加

入試説明会等について：

鯖江高校（説明会での看護福祉学部のプレゼンテーション）

オープンキャンパス（社会福祉学科ゼミ体験グループ担当）

大野高校探求学習（テーマに関するアドバイスと指導）

(4)その他、自発的活動など